加賀の千代女

江戸時代を代表する女流俳人

「朝顔やつるべとられてもらひ水」の句で知られる加賀の千代女は、江戸時代を代表する女流俳人のひとりです。

千代女は、元禄16年(1703)加賀国松任町(現在白山市)の表具師、福増屋六兵衛の娘として生まれました。幼いころから俳句に親しみ、湊町、本吉（現 白山市美川）の俳人たちに学んだと伝えられています。

千代女は17歳のときに松尾芭蕉の弟子のひとり、美濃の各務支考にその才能を認められ、家族に不幸が続く中でも、俳諧への強い思いを持ち続け、非凡な才能を示していきます。

52歳で尼となった後の10年余りは、めざましい活躍を見せ、宝暦13年(1763)には朝鮮通信使への贈り物として21句の俳句をしたためた掛物と扇子を加賀藩に献上するなど、国際交流の先駆けを果たしています。

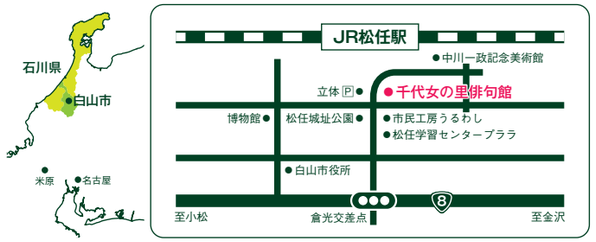
施設概要

鉄筋コンクリート造2階建て

建築面積	897.56㎡
延床面積	1,277.63㎡
1階	780.33㎡
2階	497.30㎡

利用案内

開館時間■9:00～17:00（入館は16:30まで）
休 館 日■月曜日(祝日の場合は翌平日)、年末年始
入 館 料■一般￥200(団体￥100)
高校生￥100(団体￥50)
中学生以下無料



交通案内

電 車　ＪＲ松任駅※下車　南口から徒歩１分
（※普通列車で金沢駅から10分、小松駅から20分）
東　京～金沢　北陸新幹線 かがやき　約２時間半
大　阪～金沢　特急サンダーバード　約２時間半
名古屋～金沢　特急しらさぎ 約３時間
（東海道新幹線 米原乗換約2時間半）

飛 行 機　小松空港からJR小松駅経由でJR松任駅下車

車　北陸自動車道 白山ICより約10分
駐車場 松任駅南立体駐車場（３時間無料）

バ ス　北鉄バス「松任」経由の路線利用
「松任」停留所から徒歩1分

千代女の里俳句館

〒924-0885　石川県白山市殿町310番地
TEL(076)276-0819　FAX(076)276-8190
E-mail　chiyojonosato@city.hakusan.ishikawa.jp
URL　http://www.hakusan-museum.jp/chiyojohaiku/

「百なりやつるひと筋の心より」蔓葉図千代自画賛「百なり」の句竪幅

千代女の里俳句館

白山市

［千代女の里俳句館のご案内］

俳句館は俳句を通した市民交流の場です

千代女の里俳句館は、俳句を通した交流・体験活動のための拠点施設として設置されました。

千代女の里俳句館では、千代女をはじめ多くの俳人たちについて、映像や作品ならびに句集等を紹介するとともに、子どもたちや外国の方々にも俳句を作り楽しんでもらえるようなコーナーを備えています。

また、千代女全国俳句大会や千代女少年少女全国俳句大会などを開催するほか、俳句愛好者の方々には気軽な句会の場としてご利用いただけます。

投句のご案内

千代女の里俳句館では、市内各所に俳句ポストを設置し、広く俳句を募集しています。また、メールでの投句も受け付けています。どうぞご利用ください。

〔常設展示室〕子どもから大人まで、俳句や季語について楽しく学べます。また、千代女の直筆の掛軸等も展示しています。

〔エントランスホール〕特別展示コーナーやクイズコーナー、投句コーナーなどがあります。

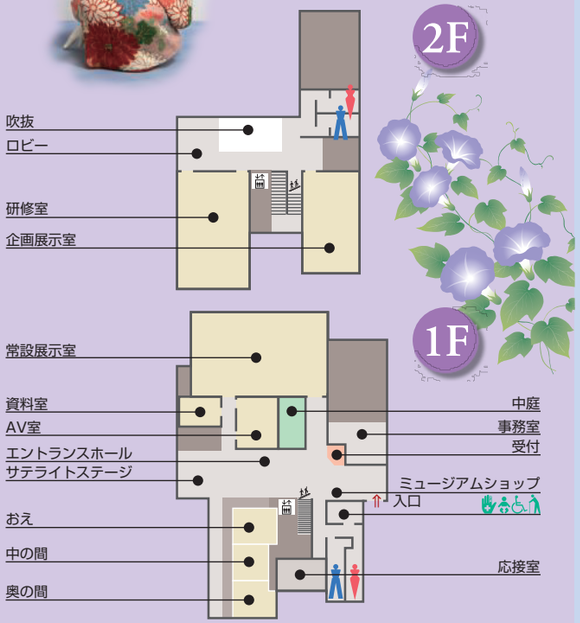
〔おえ、中の間、奥の間〕畳敷となっており、庭を見ながらの休憩や句会に使用できます。

〔研修室〕約80人が利用できる講座室です。句会にも使用できます。

〔企画展示室〕白山市内の俳人の句や作品などを展示しています。

〔AV室〕「千代女　季と生きた生涯」などの３種類の映像を放映しています。

〔資料室〕千代女に関係する書籍と、寄贈された句集が閲覧できます。(要事前予約)



千代女年譜

年号	西暦	年齢	事項
元禄2	1689		松尾芭蕉が『おくのほそ道』の旅に出立、7月24日松任を通る
元禄16	1703	1歳	加賀国松任の表具師、福増屋六兵衛の娘として生まれる
正徳4	1714	12歳	本吉(現在の白山市美川)の半睡のもとで学ぶ
享保4	1719	17歳	8月24日、芭蕉高弟、美濃の各務支考は、松任で千代女に会う 支考はこのとき「あたまから不思議の名人」と称賛する
享保5	1720	18歳	金沢の福岡某に嫁ぐ(金沢大衆免の大組足軽、福岡弥八とする伝がある)
享保6	1721	19歳	6月、金沢で、名古屋の沢露川が来遊したのに会した
享保7	1722	20歳	この頃、夫に死別し実家に帰る 露川の俳諧撰集『北国曲』に入集。初めて俳書に掲載される
享保10	1725	23歳	春に伊勢に行き、中川乙由を訪ねてその門に入った。小松の宇中が「伝千代女書」を著す
享保11	1726	24歳	4月に、金沢の紫仙女を訪ねて俳諧連歌二巻を成し、松任郊外の行善寺（現在の白山市北安田町）に奉納した。この連歌を小松の兎路は編集して『姫の式』として出版する
享保12	1727	25歳	美濃の廬元坊里紅が松任に千代女を訪ねて、俳諧撰集『桃の首途』の「松任短歌行」が成る
享保17	1732	30歳	初夏の頃上洛。乙由と京で再会する
元文2	1737	35歳	10月7日 釈宗和没 父か(「福増屋法名軸」)
元文4	1739	37歳	3月24日 釈妙祐没 母か(「福増屋法名軸」)
寛保3	1743	41歳	9月20日 釈永了没 兄弟か(「福増屋法名軸」)
延享3	1746	44歳	6月、建部涼袋(当時は都因と号した)が千代女を訪ねる 涼袋は、「市中に婦人の産をわすれざるを感じて」と千代女の近況を語る
寛延元	1748	46歳	尾張の百川が加賀能登を歴遊。加賀で書画の作成が盛んになる 鶴来金剱宮奉納額に「松任表具屋千代」と記名する
宝暦4	1754	52歳	10月、剃髪し素園と号する
宝暦5	1755	53歳	5月、山本氏(松任町年寄、米屋八左衛門)の墓碑に掉句を刻す
宝暦10	1760	58歳	3月、金沢東別院の親鸞上人五百回忌法要に参詣する 9月、越中の井波瑞泉寺に参詣する
宝暦11	1761	59歳	京の東本願寺の五百回御忌に、珈涼尼と上京する この頃、狩野派画人達と多くの合作軸を作る
宝暦12	1762	60歳	1月25日 釈了和没　兄または弟の子か(「福増屋法名軸」) 3月末に越前の吉崎御坊に参詣し、「吉崎紀行」をまとめる 養子六兵衛(白鳥)を迎えたのはこの頃か
宝暦13	1763	61歳	8月末、第11次朝鮮通信使の来朝に、藩の下命によって、懸物六幅扇子十五本を書き上げる
明和元	1764	62歳	既白編『千代尼句集』上下2冊が出版される
明和2	1765	63歳	2月中頃、飛騨の千尺の求めに『飛州十景絵巻』に賛句を書き送る
明和7	1770	68歳	大津義仲寺の芭蕉堂、三十六人肖像に、智月尼の題句を書く
明和8	1771	69歳	信濃の加舎白雄は、京への途上、病体の千代尼と会する 既白編の千代尼句集後編『俳諧松の声』が出版される
安永3	1774	72歳	与謝蕪村編『たまも集』に序文を寄せる
安永4	1775	73歳	9月8日、長く続いた病の末、長逝した　享年73歳